

# There 構文分析における動的文法理論と用法基盤モデルのインターフェイス

## An Interface between the Dynamic Model of Grammar and the Usage-Based Model on There-Constructions

新 妻 明 子

### 0. はじめに

there 構文のタイプや派生などに関して、これまで様々な議論が展開されてきた。there 構文の生成に関して、生成文法においては、次の (1a) と (1b) はほぼ同義関係にあり、(1a) から (1b) の存在文が派生すると考えられている。

- (1) a. A ship will be under water.  
b. There will be a ship under water. (原口他 2000)

具体的には、(1a)の主語の位置にある a ship が be の直後に移動し、空になった主語の位置に虚辞 there が挿入されて (1b) の there 構文が派生する。さらに、there 構文は、動詞によって大きく自動詞タイプと他動詞タイプに分類され、意味特性からは Milsark(1974)によると、存在型、所在型、迂言的内容型、提示型に分類される。これらすべてのタイプを (1a) から (1b) への派生と同様には説明できないため、内田 (1999) では、there 構文の派生構文の形成に関して、Kajita(1977) による動的文法理論の考察が有効であると提案している。簡単に説明すると、動的文法理論では、派生的な規則は言語習得のある段階で前の段階をもとに基底構造から派生する段階を経て再解釈され、派生構文ができあがると主張する。生成文法では例外として扱わざるを得ない周辺の構文に関して、動的文法理論では言語習得と併せて統一的な派生のプロセスを説明することが可能であるように思われる。

一方で、認知言語学によるアプローチでは、原則的に「形式が違えば意味も違う」という理論に基づいており、(1a) と (1b) に生成文法のような派生関係を認めていない。Lakoff(1987) では、there 構文を大きく存在文と提示文に分類し、存在文はメタファーによる提示文からの拡張であると分析した。それぞれの派生構文についてもプロトタイプから派生したひとつのカテゴリーを形成し、メタファーやメトニミーによって根拠となる動機付けを分析している。

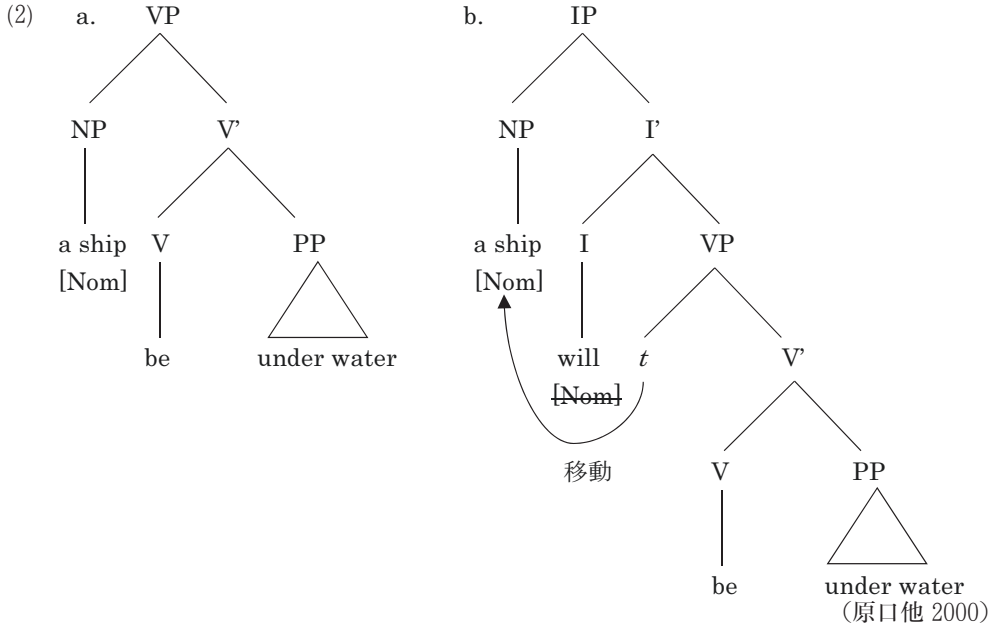
これらの理論が提唱するモデルは全く異なるものとして扱われているが、構文の核と周辺の派生関係や習得過程を考慮している点で共通性があると思われる。両方の観点から分析することで、構文の核と周辺の関係に関して相補完的に説明することが可能であるのではないかと考え、本論では there 構文の分析に関して 2つのモデルによるアプローチを比較検討し、さまざまなタイプの there 構文を習得の過程も含めて統一的に説明することを試みる。

### 1. 生成文法における分析

前節で述べたように、生成文法では主語の位置にある NP の移動と there の挿入によって、

(1a) から (1b) の存在文が派生すると考えられている。その構造について見てみよう。

まず、(2a) において、存在を表す本動詞 *be* が場所句 *PP* と併合して *VP* を作り、その *VP* が主語の *NP* と併合して *VP* を作る。ここで、*be* 動詞は目的格の素性 [Obj] を持っていないため、主格の素性 [Nom] を持った *NP* は *I* に引き寄せられて *IP* の指定部へ移動する (2b)。



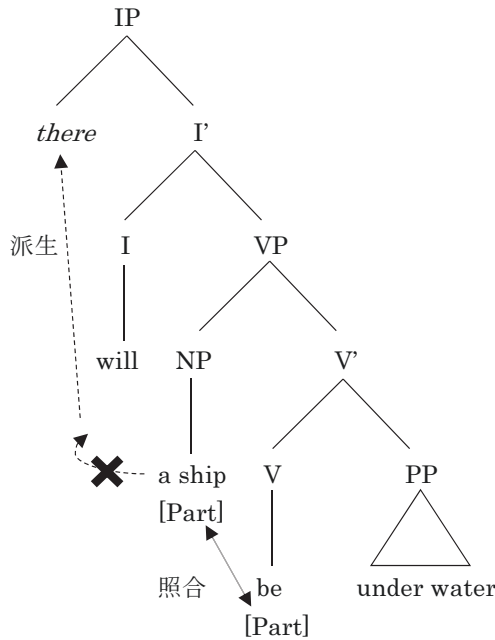
原口他 (2000) によると、A ship のような不定冠詞を持った *NP* は、10 艘の中の 1 艘のように複数の中の一部を表すことがあり、このような用法を不定冠詞の部分的用法という。部分的用法では、*NP* は主格ではなく「部分格」という特殊な格を持っているものと仮定され、動詞の方も、ある特定のグループの自動詞に限り部分格に関する情報、素性 [Part] を持つことができる。Belletti(1988) によると、部分格とは非対格動詞により与えられる格である<sup>1</sup>。本動詞 *be* もそのようなグループに属する動詞の 1 つであり、素性 [Part] を持ち得る。(2a) の *NP* および *V* が [Part] を持っている場合には、*VP* の指定部・主要部の関係において格情報の照合が行われる。したがって *NP* は *IP* の指定部へ移動する必要がない。英語では必ず主語の位置、つまり *IP* の指定部に何らかの要素が生じなければならないので、*VP* 内主語が移動しない場合には、特別な意味を持たない虚辞 *there* が併合する。(2a) の *VP* に *I* が

<sup>1</sup> (1) There arrived a man.

(2) \*There was killed a man.

(1) において、*arrive* が非対格動詞なので、*a man* は部分格が付与される。(2) では、*there* に与えられた格が *a man* に転送されるため、格フィルター違反は生じず、排除することができなかった。これは、格転送という機構に問題があるので、この機構を排除し、部分格を与える能力を持つ特定の動詞があり、その動詞の補部に名詞句が現れたら部分格が付与され、格フィルターを逃れる、と Belletti は主張する。(2) において、*kill* が部分格を与える能力を持たない動詞なので、非文ということになる。(安藤・小野 1993)

(3)



併合して IP、さらにその IP に there が併合して IP を作ると、(2b) の存在文が派生し、(3) の構造が生じる。しかしながら、(1a) のような存在文があるにもかかわらず、なぜこのような派生を経てまでも there 構文が必要になるのか、また、虚辞 there の派生の根拠は何か、などの疑問が残る。このような派生に関して、内田 (1999) では動的文法理論によって習得を考慮した派生を提案した。

## 2. 動的文法理論によるアプローチ

### 2.1. 動的文法理論の発想

まず、動的文法理論について概観しておく。チョムスキーによって提唱された生成文法理論では、子供が生まれながらにして豊かな内部構造を備えた普遍文法を持っているという前提の下に議論が展開されてきた。これによって多くの有意義な言語習得の事実が明らかにされてきたが、一方で人間の使用する言語において、文法規則によって説明できない表現も多い。生成文法ではそれらの表現を例外として扱うことになり、周辺の表現に関する文法規則に関しては疑問が残っている。

Kajita(1977) によって提案された「動的文法理論 (dynamic model of grammar) は、「非瞬時的モデル」、「拡張理論」などとも呼ばれ、文法獲得には必ず一つ前の段階で獲得された文法能力が何らかの影響を持っていると主張する。Chomsky たちの「瞬時的」な文法理論との比較において、基本的な考えは次のように定式化される。

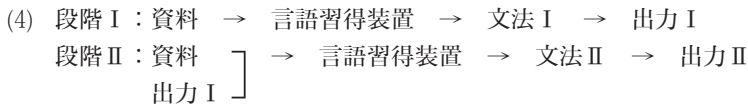
(4) A : G において、X という種類の規則が可能である。

B : G において、Y という条件をみたま規則群があるならば、 $G_{i+1}^i$  において Z という種類の規則が可能である。

(G は任意の個別文法、 $G_{i+1}^j$ 、 $G_{i+1}^j$  はある任意の個別文法  $G_j$  の習得段階  $i$  およびそれに続く  $i+1$  における文法)

(梶田 1984)

この理論によると、時間軸を考慮に入れた上で、獲得する文法には核と周辺部という相対的な守備範囲があると考えられ、基本構文を元に何らかの操作によって派生する構文の一部は周辺の部類に属するものと分析する。以上をまとめて内田 (1999) では動的な文法を次のように例示している。



(内田 1999)

(4) では、段階 I において子どもが周囲で話される言語資料を用いて、言語習得装置を通じて文法 I を出力することができ、さらにその出力 I に新たな言語資料が加えられると、言語習得装置を通じて文法 II の出力ができるということを示している。

この理論に基づいて there 構文の用法の拡張を考えると、ある基本的な構文がいったん習得され、その用法が拡張されて様々な変異形が生じてきたと仮定することができる。また、拡張するたびに元の構文の性質の一部が、派生的な次の段階の構文に受け継がれるといえる。そこで、there 構文の派生に関する内田 (1999) の分析を取り上げる。

## 2.2. 動的な文法理論による there 構文分析

前節で述べた動的な文法理論に基づいて、内田 (1999) では there 構文における there の派生について次のように仮定している。

- (5) 副詞としての意味内容をもつ there → 場所を表す副詞句を導入する指標 → 主語位置を充足させる意味を持たない名詞

言い換えれば、「そこ」という具体的意味内容をもつ there がまず存在していて、文頭すなわち主語の位置に置かれて使用され、次の段階では場所を具体的に示す副詞句が、意味を持つ there があるにもかかわらず there 構文中に表れるようになった。より具体的な副詞句に情報量が集約されるようになっていくので、there の場所副詞としての機能は薄れてゆく。ただし主語位置を占めるということは構文上変わらず、仮主語の it と同じように文体を整備する機能のみを果たすようになり、主語機能のみを果たすには品詞として副詞から名詞に再解釈されるようになったと考えられる。(内田 1999)

そして、基底構造が認められないような (6) の例文に対して、(7) のようなパラダイムが存在すると仮定している。

- (6) a. \*Many reasons for believing this are.  
 b. There are many reasons for believing this.

(7) 通常の存在文（基底になる文）-----▶ there 構文（一般的）



ギャップ-----▶ there 構文（(6b) タイプ）

（内田 1999）

(6) では基底構造が認められないため、(6a) から (6b) の there 構文を導くことができない。この問題に関して、(5) を前提として考えると、(6b) の there は副詞としての機能や意味はないため派生的であるといえる。(6) の上段では、生成文法による分析で示したように移動と there 挿入によって基底構造から there 構文が派生するが、there 構文の型が習得された次の段階では、その型に当てはめて相手にわかりやすく新情報を伝達する行為が起り、それゆえに変形操作なしでそのままの形で基底から派生する構造が一部に存在する可能性が示唆されている。このように、動的な文法理論による分析から、there 構文の派生や there そのものの性質がいくつかの習得段階を経て変化しつつ定着してきたと考えられる。

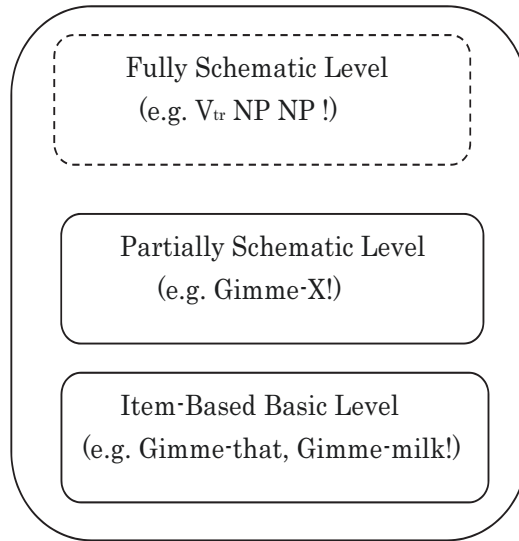
### 3. 用法基盤モデルによるアプローチ

#### 3.1. 用法基盤モデルによる構文習得過程

生成文法では、構文は自律的な統語計算の随伴現象にすぎないという立場をとるのに対し、認知言語学の研究パラダイムでは、構文という言語単位自体に積極的な意義を認めている。言語習得に関する研究では、Tomasello(2003) に代表される用法基盤モデルに基づくアプローチが注目を集めており、Langacker(2000) の用法基盤モデルに基づく言語習得モデルを提唱し、構文習得に関して、項目依存構文の習得や動詞島構文の形成など、実際の言語習得のプロセスに即したボトムアップ的な言語習得のプロセスを重視している（児玉・野澤 2009）。

構文習得に焦点を当てると、スキーマ形成とその拡張によるメカニズムによって構文が習得されると考える。Yamanashi(2002) では、動詞 give と二重目的語構文の用法基盤的な習得過程を図1のようにモデル化して示している。

子どもの習得過程において、図1の Item-Based Basic Level では、子どもは “Give me that.” (“Gimme that.”) や “Give me milk.” (“Gimme milk.”) などの表現を模倣し、再現しながら習得していく。そのような表現が習得されて使用頻度が高くなると、共通するパターンを抽出して、‘Give me X’ というスキーマを形成する。図1における Partially Schematic Level の段階がこれにあたり、この段階で子どもが習得しているのは部分的にスキーマ化された構文である。ここでは Gimme という言語単位がゲシュタルト的に認知され、スキーマ化していると考えられる。そこからさらに、me 以外に様々な表現に触れていくと、もう一段階スキーマ化された ‘Give NP NP’ という構文パターンが習得される。ここから最終的には二重目的語をとる動詞自体のタイプ頻度が上昇することによって、子どもは完全にスキーマ化された構文として、図1の Fully Schematic Level にあたる ‘Vtr NP NP’ という抽象的な構文パターンを習得すると考えられる。このようなスキーマとその拡張によって構文が習得され、その結果、様々な言語表現が創造されていくと考える。このような理論に



【図1】スキーマ化と構文の習得過程 (Yamanashi 2002)

基づき、次節では there 構文の分析を取り上げる。

### 3. 2. Lakoff(1987) による there 構文ネットワーク

本節では、前節で取り上げた用法基盤モデルに基づいた構文習得という観点から there 構文を見ていくことにする。とりわけ、Lakoff(1987) による there 構文の構文ネットワーク形成について概観したい。Lakoff は、there 構文を直示的 there 構文と存在的 there 構文という2つの大きなグループに分類し、それぞれの中心的な構文からさらに合計16タイプ程度の下位構文があり、それらが放射線状カテゴリーを形成するという分析を詳細に行った。まず、直示的 there 構文と存在的 there 構文の中心となる例文を見てみよう。

- (8) a. There's Harry with his red hat on. (直示的 there 構文)  
 b. There was a man shot last night. (存在的 there 構文)

本来 there は場所を示す指示的副詞であるため、直示的 there 構文の方を基本構文と考える。また、機能的には、話し手が聞き手に対して何かを指し示し、それに注目させるという機能を持つことから、聞き手にとって新情報であるという条件が必要となる。

また、存在的 there 構文とは、メタファーによる直示的 there 構文の拡張であると考えられる。直示的構文では、実際の物理的空間内にある実体が存在し、それを指し示し、聞き手に注目させるという状況を表す一方、存在的 there 構文では、聞き手に指し示す空間が、実際の物理空間がメタファー的に解釈された心理的空間 (メンタル・スペース<sup>2</sup>) を表す。これらの関係について簡単に示すと次のようになる。

<sup>2</sup>Fauconnier(1985)のメンタル・スペース理論によると、メンタル・スペースは、言語解釈を媒介する心的空間であり、言語と対象との間の認知的インターフェイスとして働くものである。

- (9) **直示的 there 構文** 実際の物理空間内にある実体が存在する  
 ↓ メタファー  
**存在的 there 構文** 思考などの概念的実体が生じる心理的空間（メンタル・スペース）が「場所」としてメタファー的に解釈されている

さらに、2つのタイプの構文は統語特性においても完全に異なる。次の表で統語的振る舞いの違いと例文を見てみよう。

【表1】

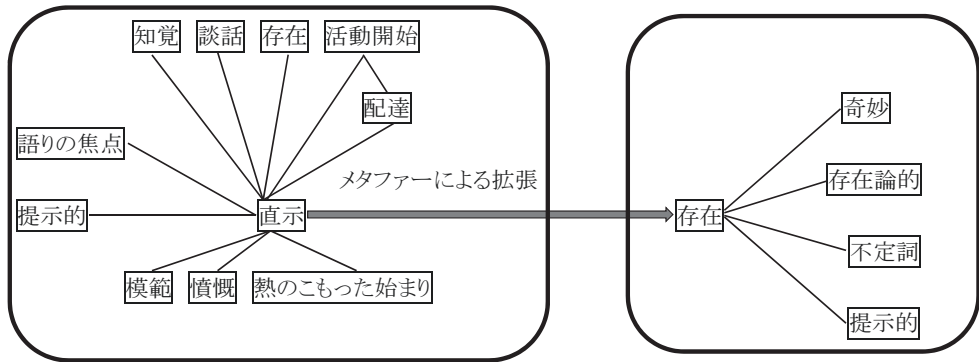
|                 | 直示の there 構文   | 存在の there 構文   |
|-----------------|--|--|
| (10) 付加疑問文      | × a. *There's Harry with his red hat on, isn't there?                      | ○ b. There was a man shot, wasn't there?                                   |
| (11) 繰り上げ構文     | × a. *There is likely to be Harry with his red hat on.                     | ○ b. There is likely to be a man shot.                                     |
| (12) 否定可能性      | × a. *There isn't Harry in the room with his red hat on.                   | ○ b. There wasn't anyone in the room.                                      |
| (13) 従属節への埋め込み  | × a. *If there's Harry in the room with his red hat on, I'll be surprised. | ○ b. If there's anyone in the room with his red hat on, I'll be surprised. |
| (14) here との 交替 | ○ a. Here's Harry with our pizza.  | × b. *Here will be a man shot tomorrow.                                    |

(河上 1996)

このように統語特性も異なることから、2つのタイプの there 構文を区別する必要性がある。また、付加疑問文や繰り上げ構文に生じる要素は主語とみなされることから、(10)と(11)は主語性のテストにもなる。その結果から判断すると、存在的 there 構文の there は主語であるが、直示的 there 構文の there は主語ではなく、場所副詞であると考えられる（河上 1996）。この結果から、2つのタイプの there 構文は何らかの関係性を持ち、動的文法理論でも問題点として挙げられた there の品詞の地位に関する問題に関しても、その関係性が動機づけとなる可能性があると考えられる。

さらに Lakoff は、その他の非中心的構文として、統語的要素や機能的条件などの違いによって、直示的 there 構文を 10 タイプ、存在的 there 構文を 4 タイプに分類し、中心的な構文からどのように動機づけられてカテゴリーを形成しているかを分析した。概要を図に示すと次のようになる。





【図2】 there 構文における中心的な構文と下位構文のネットワーク

図2において、直示と存在の中心的構文に相当するのが例文(8a)と(8b)である。それぞれの中心的構文から拡張した下位構文が放射線状カテゴリーを形成し、さらに there 構文全体で1つのカテゴリーを形成している。図の下位構文のタイプを代表する例文は次のとおりである。

(15) 直示的 there 構文

- a. 知覚的： There goes the bell now!
- b. 談話： There's a nice point to bring up in class.
- c. 存在： There goes our last hope.
- d. 活動開始： There goes Harry, meditating again.
- e. 配達： Here's your pizza, piping hot!
- f. 模範： Now there was a real ballplayer!
- g. 憤慨： There goes Harry again, making a fool of himself.
- h. 熱のこもった始まり： Here I go, off to Africa.
- i. 物語の焦点： There I was in the middle of the jungle.
- j. 提示的： There on that hill will be built by the alumni of this university a ping-pong facility second to none.

(a-j Lakoff 1987)

(16) 存在的 there 構文

- a. 奇妙： There's a man been shot.
- b. 存在論的： There is Santa Claus.
- c. 不定詞： There's making dinner to start thinking about.
- d. 提示的： There walked into the room a tall blond man with one black shoe.

(a-d Lakoff 1987)

それぞれの下位構文はメタファーやメトニミーによって動機づけられ、中心的構文の統語的・意味的・機能的特性を受け継いで拡張していると考えられる。例えば(15b)において、実



際の物理的空間から談話空間へのメタファーと、具体的事物から談話内容 (a nice point to bring up in class) へのメタファーが関与しており<sup>3</sup>、統語的要素と聞き手の意識を向けるという機能的特性は保持されている。

以上のように、中心的な構文が獲得されると、そこからメタファーやメトニミーによる解釈を介して周辺の構文に拡張していくが、統語的・機能的特性は受け継がれたまま there 構文というひとつのカテゴリーを形成するのである。

#### 4. 構文の派生における2つのアプローチの共通性

動的文法理論と用法基盤モデルに基づいた構文習得のメカニズムは、根本的に異なる文法理論に基づいており、there 構文を例に取り上げて比較してみると、there 構文の there の分析や構文自体の生成に関して前提としている事柄が異なっている。しかしながら、全く相反する理論であるとは言いきれない部分があるように思われる。本節では、there 構文の習得過程における2つのアプローチを比較検討しながらその共通性を探っていく。

##### 4.1. there の機能

動的文法理論では、(5) で示したように、初めは「そこ」という意味内容を持つ副詞としての there が存在していたが、統語的な移動によって主語位置を占める機能のみを果たすようになり、副詞から名詞へと再解釈されるようになったと分析される。これは、仮主語の it と類似的な機能を持ち、統語的にも統一的な説明が可能であると思われる。

一方、用法基盤モデルを提案する認知文法理論では、there は直示的に「そこ」にある実体に聞き手の注目を向ける機能を持ち、直示的 there 構文で場所副詞として扱われる。しかし、存在的 there 構文では物理的空間を指さないことから、メンタル・スペースという抽象的なセッティングを指示する名詞句であると考えられる。

このように、there の地位における副詞から名詞への変化は共通する点であり、その変化のプロセスにおいて、中心的構文からの拡張によって there の機能面が強調されていくことになったと解釈できる。これはまさに、文法化の現象と同様であると考えられるが、あくまでも there 構文の構文内の there に限られているため、構文レベルでの文法化という点に関してはさらに検討が必要である。

##### 4.2. 周辺の構文の派生

数多くの there 構文に関して、中心的な構文と周辺の構文があるという事実はどちらの理論においても指摘されている。動的文法理論では、本来備わっている言語習得装置によって中心的な構文を獲得し、その後新たな言語資料が加わることによって、次の段階の文法を獲得し、それが周辺の構文の習得に適用されているということが示唆されている。つまり、構文の派生には新たな言語資料が必要となり、文法それ自体も変化していくことになる。

一方、用法基盤モデルでは、発話からボトムアップ的に得られるスキーマのネットワークとして文法を捉えている。プロトタイプとなる中心的な構文と拡張事例である新たな言語資料からスキーマを抽出し、そこからさらに上位のスキーマを産出することで、文法が拡張して

<sup>3</sup>「談話空間は物理的空間、談話要素は実体」であるというメタファーによって動機づけられると分析されている。

いく。

しかし、このように拡張が進んでいけば、さらに多くのタイプの there 構文を生産していくことになるのだろうか。両理論において、周辺的な構文であってもタイプ別に分類できるのは、その拡張による生産性がブロックされる要因があるといえる。その一因と考えられるのが、聞き手に新情報を提示するという機能的特性である。また、前述したように新たな言語資料がインプットされることによって派生的な構文が産出されていくと仮定した場合、中心的な構文の特性が保持されたまま受け継がれることになり、どの要素がどの程度受け継がれるのか、その要素とは統語的特性、意味的特性、機能的特性のどれが重視され拡張に影響を与えるのか、派生的な構文のタイプによっても異なっていると思われる。構文の生産性や拡張のブロック要因に関しては、どちらの理論においても疑問が残る部分であり、そのメカニズムをさらに分析するためには、実際に使用される場面を含めた分析、つまり、語用論や機能文法論によるアプローチによるところが必要不可欠である。

## 5. 結び

本稿では、there 構文の生成とその派生について、動的文法理論と用法基盤モデルという2つの理論によって分析した。1節では動的文法理論の発端となる生成文法による there 構文の基本的な統語的構造を示した。2節では内田(1999)による先行研究に基づいて動的文法理論による there 構文の派生の過程を考えた。3節では Lakoff(1987)の先行研究に基づき、用法基盤モデルによる there 構文のカテゴリーを提示した。そして4節では両理論における there 構文の派生に関する共通点を探った。基本的に相反する両理論による分析について議論し、共通点を探ることによって、中心的な構文から周辺的な構文への拡張を伴うメカニズムや、それらの動機づけにおいて機能的特性を無視することはできないということが明らかになった。また、生成文法で扱われているような非対格動詞と非能格動詞の区別や統語的特性に関して、認知文法における代表的な先行研究として取り上げた Lakoff(1987)による分析だけでは説明不十分な点があると思われるが、習得を考慮に入れ、中心的な構文と周辺的な構文を統一的に扱うことのできる用法基盤モデルの発想は、動的文法理論にも活用されていると思われる。さらに様々なタイプの there 構文の違いや派生を制限する要因などに関して明確にするためには、語用論や機能文法論も踏まえてより詳細な議論を展開していく必要があるだろう。

### 【参考文献】

- 安藤貞雄・小野隆啓．(1993)『生成文法用語辞典—チョムスキー理論の最新情報』東京：大修館書店．
- 原口庄輔・中島平三・中村捷・河上誓作．(2000)『英語学モノグラフシリーズ1 ことばの仕組みを探る』東京：研究社．
- Kajita, M. (1977) "Towards a Dynamic Model of Syntax". *Studies in English Linguistics* 5: 44-76.
- 梶田優．(1984)「英語教育と今後の生成文法」『言語普遍性と英語の統語・意味構造に関する研究』60-94.
- 河上誓作．(1996)『認知言語学の基礎』東京：研究社．

- 児玉一宏・野澤元. (2009)『講座 認知言語学のフロンティア 6 言語習得と用法基盤モデル—認知言語習得論のアプローチ』 山梨正明 (編) 東京: 研究社.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Milsark, G. L. (1974) *Existential Sentences in English*. New York: Garland.
- 内田恵. (1999) 「There 構文の用法とその派生について」『Ars Linguistica(Linguistic Studies of Shizuoka) 興津達朗先生傘寿記念特集号』 Vol.6 40-58.
- Yamanashi, M. (2002) “Cognitive Perspectives on Language Acquisition.” *Studies in Language Sciences* 2: 107-116.